

土左日記の研究

——記録性と文学性の境界に注目して——

人文社会科学部文化創生課程文化資源学コース

20H1099 前多 葵衣

序章

本論文では、紀貫之によって執筆されたとされる『土左日記』が、日記文学作品として分類される理由を、多様な作品との比較を通して考察することを目的とするものである。

まず、広義の日記文学とは、記録が主となる日記の中で、特に筆者の主体的な行為や人生観が強く表され、内省的・感動的な内容を持ったものを言う。平安時代に確立した文学ジャンルとしての日記文学はそれとやや異なり、一人の人間の生涯のほぼ全貌、もしくは特定の限られた体験にもとづいて、その人生を再構成し、その内面像を改めて表出した一群の文学作品を指す。

『土左日記』は仮名日記文学の先駆けとされている。その一方で『蜻蛉日記』や『更級日記』をはじめとする仮名日記文学作品と比較すると、物語性が乏しい。『土左日記』には、亡児哀傷や望郷の念といった主題が散見するものの、全体を通しての大きな主張は見られない。また、漢文日記やその他の記録と比較すると、虚構の部分が多く記録性は乏しい。

以上のことから、『土左日記』が日記文学として分類される所以を再検討しようと考えた。

第一章 漢文日記との比較

本章では、貴族によって書かれた私日記、宮中での仕事の際に記された公的日記、文体の一つである「記」との比較を通して、『土左日記』の性質を考察する。

『土左日記』の冒頭に、「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。」とあるように、当時の日記とは男が書くものであった。その内容は、政治の記録や儀式の手順などの記録である。このことから、紀貫之は記録としての日記（以下、漢文日記）の存在を知った上で『土左日記』の執筆に至ったのではないかと仮説を立て、検討を進めた。

まず、私日記との比較を行ったところ、日付の書き方に共通が見られた。私日記と『土左日記』のいずれも冒頭に日付が記されており、前者は年次と日付、天気が、後者は日付と天気が記されていた。この形式は具注暦を用いた日記特有のものである。しかし、具注暦は基本的に天皇・親王および公卿などに頒布されるものであり、当時従五位下であった貫之が具注暦を手に入れられたとは考え難い。したがって、具注暦を参考にしながら日記を記したのではないかと考える。形式面には共通が見られた一方で、内容面はさほど共通が見られなかった。私日記とはいえども、基本的には宮中の行事や家の行事を後世に伝えるために書かれたものであるため、儀式の記録が中心となっている。そのため、『土左日記』とは記録する内容に大きな差異が見られるのではないかと考える。

次に、公的日記と比較を行った。公的日記とされる「外記日記」「内記日記」「殿上日記」はいずれも逸文が少なく、本文を用いての比較は難しい。しかしながら『侍中郡要』第四の「日記体」に日記の標準的な記録方法が示されている。貫之は小内記や大内記に任命されていたことを鑑みると、この記録方法を承知していたとも十分に考えられよう。

更に、文体の一種である「記」との比較を行った。この際、平安漢文学の主要作品を集めた『本朝文粹』を特に検討対象とした。これまで比較した私日記や公的日記と比べて、日付の記し方には一貫性が見られなかった。一方で、「記」のうち「書齋記」と「池亭記」（前中書王）と、「池亭記」（慶滋保胤）は、記録の要素もあるが、多くが自身の感情や考えを述べる部分となっている。これは漢文日記のような単なる事実録ではなく、随筆の要素をもっていると考えられよう。

以上のことから、内容面に関しては漢文日記との関連性が薄かったものの、日付の記し方に関しては共通が多く見られたことがわかる。一方で、「記」は私見を述べる作品や、文学的要素の大きい作品も多く、出来事の記録と筆者の感情や意志が併存して書かれているという点において共通であった。「記」は日記とは異なるものの、貫之が『土左日記』を著す上で、意識する存在の一つであったと考えられる。

第二章 『入唐求法巡礼行記』との比較

『入唐求法巡礼行記』（以下『巡礼記』）は円仁によって書かれた旅行記である。円仁は平安時代初期の僧であり、承和五年（八三八）に唐へ渡っている。『巡礼記』はその際の出来事を日記調で記したものである。第一章で用いた漢文日記と同様に、「をとこもすなる日記」として考えられている作品の一つである。旅行記という同一のジャンルであるため、『土左日記』との共通項が多く見られるのではないかと考え、比較の対象として用いた。

『巡礼記』と『土左日記』を比較する際、①構成や体裁について、②事実以外の記録について、③帰京・帰国に関する描写について、の三つの観点に分けて行った。また、②事実以外の記録については、さらに二観点に分けて比較検討を行った。

まず構成や体裁に関しては、第一章で用いた漢文日記と同様、冒頭に日付が記され、その後その日の出来事を記すという形であった。また、記述態度に注目すると、目的地に向かって移動している期間の場合、向かう方角やどれほどの距離を進んだか、どこで休んだのかという情報を記録する必要があるため、滞在中よりも日付の欠落が少ないということがわかる。

次に、事実以外の記録に関しては、感情描写と人物評価の二観点に分けて比較を行った。比較する際には、いずれも該当する箇所を本文から抽出した。まず、感情描写に関しては双方ともに負の感情が多いことがわかった。具体的には『巡礼記』の場合、旅の道中における不満を中心に、情勢を恐れる様子や別れを惜む様子が見られた。『土左日記』の場合は、船旅における不満を中心に、亡児哀傷や人々との別れが見られた。次に、人物評価に関しては、双方ともに人々の心持ちや礼儀などを重視していることがわかった。具体的に、『巡礼

記』では、主に移動中に円仁たち一行を泊めてくれた主人らの宗教心や心持ち、礼儀などを評価しており、『土左日記』では、梶取に対する嘲りや侮蔑の評価・任国の人々の態度や心持ちに対する評価に加えて、和歌の批評を通して人々を評価しているといえる。

最後に帰京・帰国に対する描写について比較を行った。事実以外の記録と同様に、該当箇所を本文から抽出し比較を行ったところ、両作品ともに帰郷は喜ばしいこととして捉えられていることがわかった。しかし、帰郷に至るまでの状況が異なるため、単に同一の感情とすることはできない。『巡礼記』はあくまで入唐が目的であり、『土左日記』は帰京を目的であるとする、実際に共通している箇所は目的地に対する感情であると言える。

このように、『巡礼記』と『土左日記』の間には多くの共通点が見られた。貫之は『土左日記』を執筆するにあたり、『巡礼記』をはじめとする紀行日記の文体からも多くの影響を受けた可能性が考えられる。

第三章 仮名日記作品群との比較

『土左日記』は仮名日記文学の先駆けであるとされている。他にも『太后御記』や『亭子院歌合日記』などの日記作品はあるものの、先行研究では『土左日記』をはじめとする説が多い。仮名で書かれた日記作品は、『土左日記』に比べて記録よりも物語としての側面が大きいと考え、比較検討に至った。取り上げる作品は、『蜻蛉日記』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更級日記』、『讃岐典侍日記』の五作品とした。

まず、時間の意識と記録性に着目して検討を行った。体裁面に着目すると、漢文日記とは異なり、仮名日記は冒頭に日付が記されていないことが多いことがわかった。日付を欠かすことなく記している『土左日記』と比較すると、時間の意識が薄いと言えるだろう。一方で、内容に着目した際、『紫式部日記』と『讃岐典侍日記』は、記録の仕方に、作者の体験ではなく見たものを記録する、という特徴が見られた。この特徴が、記録性を高める効果があると考えられる。

次に、回想性と序文・結びの関係について検討を行った。本来、日記の性質として回想性は見られるものの、序文が存在することでいっそう回想性が高まるのではないかと考え検討に至った。結果、序文と結びの時系列が同じであり、それ以外の本文が過去の出来事となっているという入れ子構造が重要であると考えた。入れ子構造になっている作品が『土左日記』、『蜻蛉日記』、『讃岐典侍日記』である。本来序文などがなくとも回想性が見られる日記において、あえて序文と結びを用いて入れ子構造に仕立てることで、単なる記録ではなく物語性を深める効果があると考えられる。

最後に、各作品の主題について検討を行った。『土左日記』の主題は、①亡児哀傷・親子の情について、②望郷の念・孤独について、③歌論や和歌に関する内容の三つに分けられる。一方で、そのほかの仮名日記作品は概ね主題が単一である。その中で『紫式部日記』のみ主題が散見していた。しかし、一つにまとめることができないというだけで、内容自体は全て宮廷での出来事である。そのため、『土左日記』における主題の散見と同一のものとして扱

うことができないだろう。日記は日々の出来事を記録するものである以上、基本的に明確な主題はなく、まして内容の一貫性もないものであって良いはずである。そのため、このように主題が散見する『土左日記』は本来の日記としての性質が大きいと言えるだろう。

以上のことから、『土左日記』と『蜻蛉日記』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『更級日記』、『讃岐典侍日記』の五作品との間には多少の共通が見られるものの、基本的には共通性が乏しいと言える。『紫式部日記』や『讃岐典侍日記』は比較的共通項が多いが、これは二つの作品の記録性の高さがその要因であろう。加えて、『和泉式部物語』とも称される『和泉式部日記』とは特に共通が少なく、『土左日記』が物語作品としての性質に乏しいことが窺える。『土左日記』は日記文学作品としての側面は持っているものの、記録としての日記に近い性質の作品だろうと考えられる。

終章

これまでの分類や検討を経て、『土佐日記』は記録としての日記の側面が、仮名日記作品群の中では最も大きい。しかし、年次の臙化や主題の設定・序文や結びを用いた構造といった趣向も見られる複合的な作品であった。従来の日記とは異なるものの、日記の形式を用いた散文作品であると言える結論づけた。